



## 東學

梅之與  
後編 梅花春水卷之二

東都

南仙笑楚滿人編述

## 第十三齣

明誠心謙主

爰不亦與四豪湯ハ如何ふとして鎬藤四郎の刀を絶美仕取へて  
 ふハ敵装文太が行あつて探へ需んで人を多き所を徘徊ふとて  
 刀を對せし者と刀をも時々喧嘩を仕うけて怒を起させ刀を抜て走  
 てそよそ改め見立自ら走り立まひやあらんと傍より僕客よきつ響  
 鳴と詠ふてすば達夜詠を着て又りおおおおおおおおおおおおおおお  
 預ゆよ寝ともうつたむと冠り長き一腰を摸て日毎よゑの宿の  
 曲輪を摸行あけず都くは頃ハ幾国の遺風とく。侠客とりあひの糸

一 梅花者水 卷之一

爰あらうるふ深見國ゆと呼ぶ退糧あはば群の皆つ捨て探掘の毛を  
ぬく大小の柄を巻てゐるを帶せり是ものうちの邊へさざれあらうべ  
さまが世の人もじ探掘柄組と車弓せり今も尚李園の雜劇よ  
白柄組とちうハ探掘柄を接詫見るもん。彼の閑心を察ひゆる  
者ぞとひよ誠に彼の子四嘉瀧次郎ホガアリ。俱不裁天の敵よ  
旧き笠置文太さつ日外侍乳山の禁裏あく不意も失ふる萬藤四郎の方  
を得て大吉煙び已づ考料ども一帯に帶へ又彼の姿姿境をも  
もみまわる。身筋放すらず持けりゆゑ其後行経つて蘇の花持ホガ怨魂も障化  
をうなだかすけまが金銀のあらふまつせ日毎よ廓へ入て込ま  
き。下の小城等とが義身と号つて曳連ま往還せりと麻法ふもそ

肩脣を被りて腰引むりども。真お物の美搭ふに疎みて维  
有て口がむる人きく。醫道を護りて通しけど。跡我意よどり金銀  
を貰へたらと因ふ人へうる候。解て實曉ふ縛よせく。憲の正  
奪ひそり無法。す難を傳若毎人の振舞えりける程よ。麻中の  
者ひりす更り。探掘柄組と交ふて丘彈にて忌撃する者す。う  
まく。よりく。子四嘉瀧が群の強きを下き弱き助けをもつて仁  
義を勗とめける程。人呼ぐに義組とす称へける。さまが子四嘉瀧と  
國のハ頃。花街を画を合ととりども。神の人の敵とぞ如くね  
ば。俤まる在す。因ひが振舞何をゆく。湯がひを賣多からけま。そ  
と六千。と分く。探りけり紫下某生再現唐琴。肅次郎暫く常

度より房總の間を鑑へけまども轟打つもひがくと覺てひれ  
ハ一度寺内務に逢ひて相談にて其上ふくする筋筋す探さ  
れと取て逐てけり。議中袖々不國病ひよかうと行先も自由  
ざらけま先萬飾う。源義房が方へつゝて、源氏は養生  
主べども。其身は寺内務が方へ来て暫く爰よりとて名を  
權ハと改め。母びくよ養文太がれゑ工経美る一けふ。もき者  
ヨウヒとく不國彼の出来と訓際。原末出来の權ハがみ大家  
隸筋といひ。彼より來てまわる振よ送す贈くず勤むるま  
努り。因もまじて。未だがく香よ迷ひ。三浦姫が行よ通へばす  
りとも困ひ。而て。騒固當待。さらへつての。意の高麗役の深見の女  
から。それ喧嘩ふことの程を向て。羣集の人々東西行走り。

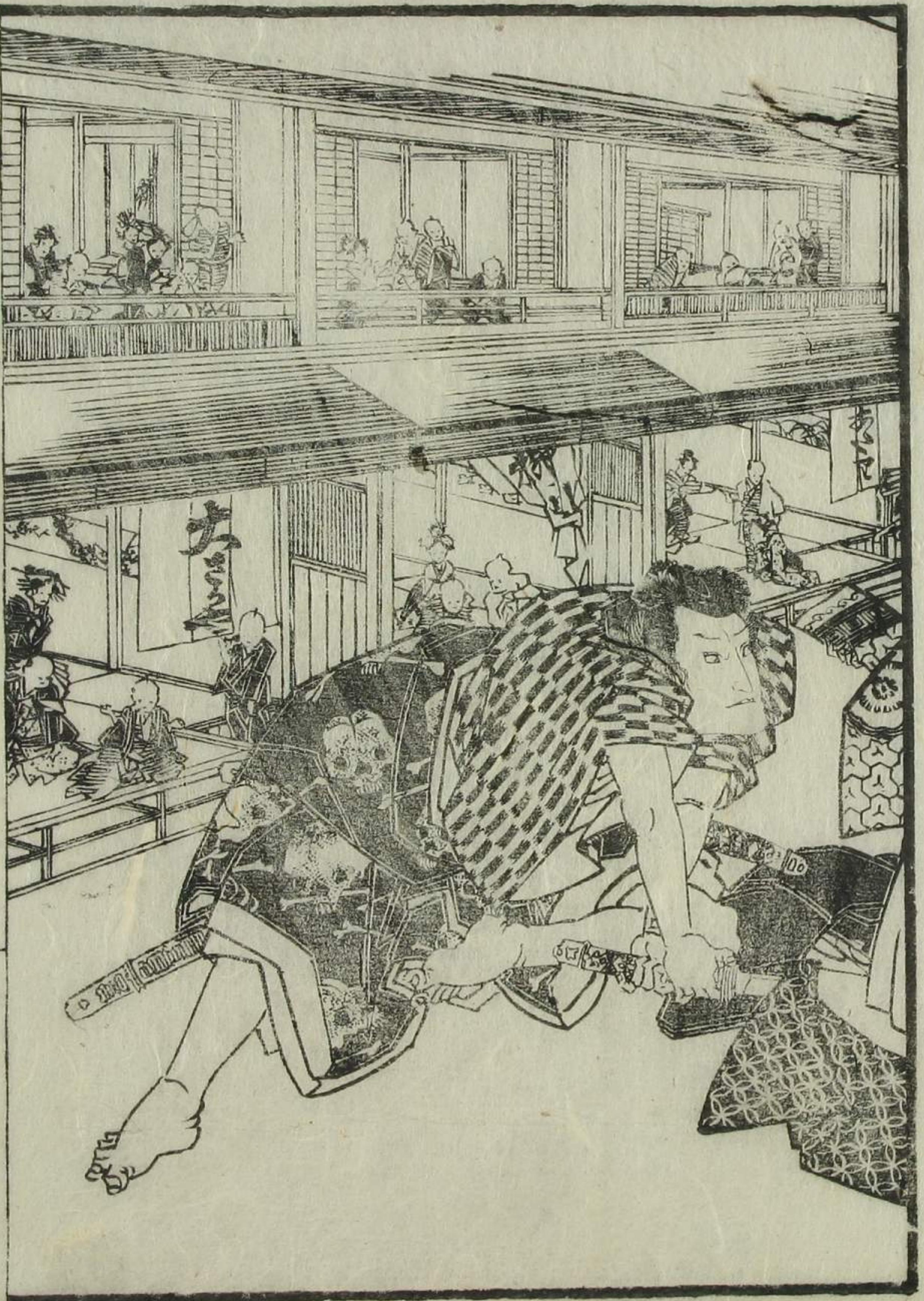
ねみて百夜ともと廻ひ。折しも秋の月中とて。廓ハ例  
の俄神。物と催せとて。其服ひのんとて。哥伎封印同  
もの趣向。皆青官乃奉服。且感じ且後ひ勁搖く折  
から。それ喧嘩ふことの程を向て。羣集の人々東西行走り。  
南少すを遣ひ。上を下へと移せたちと。右往左往よ散乱  
する。而て彼檜櫛柄の邊すのども。毛うれ美少手の胸  
ぐらばり捕へ立なる。モロ年ハ一向よ手をさげ。辯ると  
ぞ。原本不本頼の轟され。耳すもかげば異口音よ罵られ  
やうハ林我とを奈何う者とうや。汝ハ此里之未官集へする  
要。見ゆ。豫々きるのみあと呼ゆ。も聞づん。檜櫛柄の聞

一 梅花春水後卷之二

三

心が義父の者う。又金バ汝も二腰をなまさん。武士う。然  
ゆどく我らが腋刀のこどや。汝う刀の肩う。よ。持揚もゆく  
行る。又礼至極う。バ其肩う。敵。殺。魁首圍心脇  
の面前まく引ひく。魁首の差番は仰ほそと。きどり是う。要  
ひそくわよ。要念う。う多勢に。多勢に。要勢。詮方う。そ。刀ある折  
うち。又四岳夷例も曲萬へ。入りぬむ。何心ゆく。來か。に。  
宣畫とゆく。柵ハ又例の棕櫚柄柵の業。業。と。屏集。建  
押。多く。されば。置。けり。柵ハ國學の。業。業。為。捕。られ。益難。業。の。使  
刃。それ。走。り。あて。柵ハ。柵。取。る。漢の。小腕。捨。あげ。停。に。僅。と。持。存  
主。残の。奴。の。拔。速。く。切。て。柵。取。れ。縛。せ。力。り。取。散。打。語。投。付。

權ハ。を。後。よ。圓。ひ。立。う。ハ。仰。地。絆。と。そ。見。へ。よ。け。る。這。時。圓。片。揚。手。の。權  
上。よ。酒。汲。く。あ。う。け。る。か。と。笑。う。飛。ぐ。來。り。物。す。言。う。だ。又。四。岳。夷  
又。そ。う。る。に。む。る。う。と。ど。ま。箇。か。誰。く。あ。や。と。思。ひ。う。圓。ハ。豫。て。見  
き。く。し。ら。つ。び。ミ。く。ら。識。く。る。棕。櫚。柄。柵。の。劍。首。と。や。因。ひ。ど。と。見。ま。す。何。裏。か。る。狼。籍  
ヒ。言。は。毋。も。あ。べ。ぞ。問。ひ。ハ。呵。く。と。冷。炙。し。汝。ハ。梅。の。手。四。岳。夷。と。ゆ。ん。禪。名  
き。る。自。痴。と。よ。素。町。人。の。分。際。ゆ。と。我。輩。と。同。ど。く。依。客。う。え。と。ど。う。う。社  
最。片。後。い。じ。と。折。も。有。ら。バ。一。刀。の。下。よ。泉。下。の。鬼。と。う。き。ん。と。與。ひ。よ。  
時。と。そ。来。と。ま。う。童。の。我。が。子。分。の。者。へ。對。一。石。れ。と。も。い。う。へ。ま。ア。  
ま。そ。う。か。と。言。鑑。一。折。盤。あ。う。を。放。す。二。我。美。す。生。と。鄭。教。ら。一。童。が。肩  
持。頬。も。う。と。可。笑。け。星。急。く。梅。の。幹。り。う。す。我。一。刀。又。落。花。赤。糞。



梅花春水卷之二

五

うそべりと。いと驚くふ。罵りもく。亦りやすむまく。切ひ節もぞ。す四  
べのひき。鷦鷯も松樹を尽し。一上一下。虚き寒き。火の社をちかく。といどみある。折  
から三浦の山あはば。後子を兎が。せよ。はよ。ひき。す。速が。ひ  
来く。足。困る。と。手四三浦が。身体と。身凍の太刀先。火の身  
まで。切達。夏の日。雜戸。火。只。あまれ。よ。あき。まく。徐方。まく。傍  
も寄り。ゆす。多種。あ切木を携へて。遠巻。あくぞ。見。物を。出来。這  
体を見。さう。已。が。是。うけ。禰。禰。を。ゆ。迷。く。脱。く。合。く。二。今  
白刃へ。うだと。あつけ。我身を。うせよ。歎。ひ。さす。ぐの。兩人。往。方。まく。頬  
三の目。こく。ち。くま。凡合。て。下。よ。並。く。刀。と。刀。互。の。胸。も。瘡。よ。瘡。て。は。場。の。宣。義。手。四。三。浦  
猶も。度。を。勵。一。其。心。退。る。山。紫。を。ま。く。下。り。困。の。寂。左。言。ゆ。汝。も。此。  
せ

女。う。お。扇。と。幸。ひ。は。夜。み。を。あ。り。う。が。比。風。を。連。ま。上。う。く。勝。負。せ。ふ。奈  
何。く。と。黒。う。わ。ぞ。と。手。四。三。浦。こ。ら。ぎ。立。上。ん。と。欲。ま。ま。ご。も。山。紫。が。火。を  
や。か。自。み。の。上。ま。勝。と。あ。げ。其。身。よ。過。ち。あ。ら。い。更。を。あ。ま。る。よ  
暗。ま。ぐ。自。み。の。上。ま。勝。と。あ。げ。其。身。よ。過。ち。あ。ら。い。更。を。あ。ま。る。よ  
古。戦。さ。う。の。三。か。と。さ。す。ぐ。白。刃。を。い。黙。く。暫。時。躊。躇。あ。づ。き。紫  
ハ。お。微。笑。つ。二。入。よ。向。い。手。四。三。浦。主。人。も。聞。ひ。る。あ。く。と。お。き。紫  
め。り。う。ん。遺。恨。あ。る。ふ。も。あ。く。す。喧。囂。の。表。裏。と。せ。り。ん。蓋。面。の。と。と。  
あ。く。と。金。を。失。ふ。と。俠。客。と。も。き。あ。ひ。も。り。で。ひ。づ。き。や。狃。く。ば。燭。房  
狹。へ。妻。ふ。頬。け。り。く。う。最。仰。げ。う。た。業。う。ま。ご。也。二。箇。う。づ。ら。日。比  
よ。一。ト。う。じ。う。も。因。て。出。方。う。ま。が。其。身。の。有。い。更。と。あ。ま。く。ひ。う。  
あ。す。あ。高。ま。と。ひ。め。あ。ま。く。ひ。う。う。と。ま。ま。ま。ま。せ。ご。う。き。ひ。う。う。ぞ。

原木を強く務負て好まひふ四馬房。岡山もお角の山本家が組毎下  
ゆる。且抜放へて方血と刃争へて虛むきあらへ我黨のせざる所ところ白刃の下したよゑと暗やみまだ。ぞめく  
氣きはよし山本が回まわめて今日の喧けん噪ざうをかねぎた夏なつの日ひは屋や  
あらへ立飯たちくる男おとこと男おとこの仁侠じんげ。今よへども一喜きよ一悲ひ又折たたき  
こそ有あらへと言いひへ力ちからとひくとすすと。ト四馬房よしまぶ情じやうと目めを対たい  
煙えんみ合あふすと縁えんく縁えんく。倘まばらゆゆ高たか巻まき四郎よしろうとよへらんとする。と  
と拂はひ退しりぞけ武たけ士しの帶たすきの總さと町人まちにん風ふう情じやうのト四馬房よしまぶがわせられまま  
て左さ脇わきとうけめぐりと失うしなり。確たしかめとあやんとまくらへ一捧いっぱう。と  
たまごと鳥とりの巴ほ。けふの是ことすゞと岡おかのハモリハモリとして子分こぶんを

連つれ是こと早はやの出でよ。別べつは前まへの事こと。山本家やまもとお睨くわひ。りつふる元もと岡おかの事こと  
妻めが何なまきまき。とづとづ。傳つた故ゆゑののて。選えらへ。ハレのひとり。バ。子四馬房よしまぶ  
また。そく。別べつは深ふかき子細こざい。と有あらえ。何なへ。とす。あき。這なづは。眼まなこ  
取とらへ。悪あく。と。見み。西東せいとうハ。そくへ。選えらへ。權ごん八君や君やは。一いや。上じやの御ご  
あくと。出来できと返かへ。子四馬房よしまぶハ。双ふた眼まなこ。涙なみだ。と。深ふかり。權ごんハ。よに向むか。意い味み  
た。喰く。け。熟なま。と。冠かんむり。と。小串こくしの長なが。唐とう妻め。浦うら左さ門もん。様ようの慶けい  
幸こう。權ごん。次つぎ郎ろう。さふ。と。あ。よ。由ゆ方ほうの山さん。流ながり。瓦かわ。と。社しゃ。う。小串こくしハ。せま  
り。と。ま。さ。と。極きわ。と。う。ま。か。り。と。初はじの。百物ひゃくもの。か。藝う。難ひん。難ひん。幸こう。苦くさ。と。極きわて。敵てき  
さ。うち。ち。す。と。敵てき。名な。と。行ゆ。身み。よ。と。だ。も。と。後ご世せいの。美うつく。徳とく。す。と。互ひ。と。荷く  
ある。と。山さん本もとは。根ねと。奪だつ。と。が。の。子。四。馬。房よしまぶ。と。古。跡あと。と。あ。

夜と朝と日暮と通ひのゆゑ。世の邊みちづかく。まゝ因縁の外  
よしひづから。よしと。古事よりよびきこと見若浦をもつての敵襲  
文太とおきと後藤の忠義をもつて。せ唐琴の忠義と再  
興せず。忠義全き武士。やまゆらす。這子四三房が丈數を  
とあつ敵粟野十郎左衛門全く人遣わて殺せ。先達と我  
方へ來り。自殺か。ての物語。まつせんと女房小梅が身長吉も不  
意に。我よろしくあへた。最期。鬼まれ角まれ。眼裏する蓑衣文太  
孤高を捨て。且六鶴翁四郎を尋ね。妻と因ふ。もと不國院  
はるかとぞ。すむる役客。ひむるのたけ舟の拙者が身持日毎よ花舟と能回じ  
て。男達と氣をひく。よはる。其つうに我がひ駆つき。海産

衣裳の葉。則我。本性。葉をあひて。七丈数石。門が傍。葉を  
宁時。す。早。の我。示。こ。鳥。と。付。し。る。ハ。鳥。ハ。反。哺。の。孝。あ。つ。そ。諸  
色。か。ま。さ。う。一。靈。も。う。ま。ハ。時。が。あ。ひ。す。忠。義。守。ま。と。の  
戒。衣。服。の。模。模。よ。邊。か。て。朝。夕。着。る。ハ。い。づ。く。我。身。と。日。暮。省  
た。曾。子。の。教。ふ。か。づ。きて。早。く。人。よ。目。立。よ。影。を。衣。裳。の。体。達。模。模。  
忠。と。孝。と。の。賜。の。ひ。き。み。る。上。代。深。又。い。づ。き。て。寒。の。怨。す。ゆ。き。底。限  
巾。上。え。ま。ぐ。な。り。ぬ。夏。の。ま。う。き。笠。を。く。く。い。せ。と。よ。あ。く。一。古。の  
く。う。も。つ。お。づ。き。と。も。あ。が。り。上。刃。ぬ。ひ。の。笠。同。前。借。宿。ま。と。も  
ろ。せ。ハ。ゆ。ゆ。被。ひ。せ。ま。る。何。が。う。忠。義。み。う。う。る。も。と。が。り。被。の  
古。宿。お。り。う。ど。く。龜。奥。の。肆。入。る。者。ハ。其。臭。と。忘。く。と。ゆ。から。る。

推里へ入らるてあが、倘やひよたあみも出来く、大夏を忘て、享うる上  
思ふ。ゆゑもよもうす、繫の邊、鬼角へり、むろり、復讐怒る夏五  
そ。そことまつと辛抱して、こらへ思づく、達の實、一場戦のさへ、甚矣  
進する。うへぬ極めもうすが、甚矣とば、教の意をありと。隠ゆ  
候をもつて、あはれり、またやへ、年々、店年あらうて、店ひよせ。  
小覇の威きのよひすも、不さまてが、年く、代折り、我國貴重の物、數あれ  
ふやすす。わざとゆき、尽年子四事房が、心中を推量あつて、は年はね  
まわらきだり、ゆく、脚り、小室が、片へ通ひ、六門、べくす。継み、彼が、因ひ、山室によ述べ  
拵ひて、うよど。山室ハ、又君よ情をみて、渠が、もよ順が、こす。さる、故  
よと、最前の、たゞ、因ひが、子るホ、あること、捕へ、狼藉とうと覺へ

たゞ、且遅う後をよへる刀ハ、高若四郎より、けつて、と曰へて、も総  
も、かく、は、怪よと、立ちあつたゆゑ。辻、圓、又、延義もうり、維一、渠が  
策の方へ、くふと、あはは、是幸ひ、小室の言ふくやく、審よ、刀の実、  
と、たまた、自ら敵の、もうと、ひままで、あはん、はほゆと、改め  
りしと、ゆり、忠孝をもと、くもの、と、渠も、実す。あらす、四事房う辨  
ひけん、え、と、異見、お權ハ、何と、應んよする、く、差うむきて、居、す。あ  
ら、あく、よ、四事房、ゆ向ひ、參、御過て、から、敵持身と、ちと  
み、あく、よ、と、し、家、う、達、う、ゆ、わ、い、と、渠、う、く、と、通ひ  
ま、今、東、因、へ、我、う、ら、延、サ、や。おへ、花街へ、ま、ち、り、ま、  
危邦、よへらす、乱邦、よ居らす、ちの聖人の、總督、し、宿、も、忘却せ

をそくや。けよ。さるふても困らへゆらへ帶せし。刀を鷹友四郎。う  
ひあや。尋ね。蓑文太夫。あへ。さう。彼の蓑文太夫。世よ。まよ。う。軍  
と被つゝ。困らへ。入兵骨柄。と。の。口。ア。刀。故。よ。い。く。も。上。付。  
さく。と。一。ト。ハ。手。四。鷹。お。金。改。作。と。す。り。ハ。一。只。今。も。や。ト。す。如。  
拙者。う。乃。す。ち。は。窮。へ。り。と。む。全。く。そ。き。の。み。ま。ハ。腰。う。と。油  
を。あ。る。往。來。の。人。よ。生。そ。ひ。と。づ。け。と。た。う。一。ヤ。」。貴。君。ふ。す。ば  
由。を。山。第。二。山。出。ま。つ。と。因。ひ。う。豪。性。と。力。と。塗。義。ま。く。き。く。一。体  
ら。え。て。人。立。繫。き。下。す。ま。審。候。せ。ん。ハ。禍。ひ。の。端。う。つ。の。事。ゆ。隱。家  
ゆ。尚。委。一。く。物。結。つ。や。一。と。其。日。ハ。權。ハ。七。秀。ひ。く。う。つけ。

第十四回 契比翼死節

過。改。勿。憚。と。權。ハ。手。四。鷹。が。実。あ。る。諫。す。す。其。後。ハ。小。密。が。行。す  
屢。ハ。往。ど。い。く。通。べ。く。重。け。ま。だ。少。年。六。權。ハ。と。尊。慕。ひ。日。每。又。文。と  
賜。す。ま。く。其。要。否。否。と。訪。ひ。送。よ。答。ま。因。口。と。謙。う。耳。う。り。け。り。か。う。と  
け。り。程。ま。因。口。ハ。七。秀。權。ハ。が。花。街。一。あ。く。み。と。深。く。隠。ひ。蓋。く。三。浦。奔  
か。う。ひ。く。是。非。ひ。よ。あ。く。が。い。母。と。令。娘。と。湯。水。の。如。く。ま。散。ち  
あ。く。種。く。の。自。流。の。在。じ。よ。層。一。け。見。だ。離。戸。お。ハ。因。ひ。ぐ。入。ま。る。母。よ  
三。寺。佛。の。店。ま。遠。と。う。と。お。が。聚。妓。幫。間。ハ。只。深。見。大。層。と。あ。て。そ。れ  
あ。い。ま。と。お。紫。衣。ハ。猶。す。因。ひ。が。い。ま。く。毛。比。絨。よ。つ。す。す。實。の。情。を  
ゆ。の。う。す。と。り。ど。も。意。境。演。き。深。い。ふ。の。の。う。と。購。ひ。く。窮。の  
ま。花。と。う。ひ。や。だ。め。と。は。う。と。三。浦。の。互。人。互。相。援。の。う。び。け。る。わ。ぞ。小

室の事と度て大に憂ひたるは病氣と仰りとへり。引ひゆうとてま  
外へけり。主人支拂へ仰りとて病氣す。あや小室が御ゆあまち  
あくと。主と爲き鬼角病ひ。或保養とをも。ゆまとて幸ひ玉川の  
邊り風景よれ所よ別業の在りけり。暫く間小室ともあめ。  
新造未さつむ。其全狀よ待く因ひ方へ居らんと。幸甚  
ハ國が。詳解。およかほ。徳の玉川の別業へ入る。小室  
ハ先頃。一の庵へと傳ひよせり。徳の玉川の別業へ入る。小室  
がて山室へはあよ様にまわへよて。而も幸甚。小室  
あらつて。充と使とて。子四季方が許く。權ハ。と達の文と續り。たゞ。子四季萬  
富貴。とて。相ま義の曲と。權持て居。から。權ハ。離妓が  
ある。あつた。小室の方へ。贈つて。玉章と。圓。圓。が。贈。玉川堤  
の別業ぢ。あきよ。最幽。ゆゆ。の音の。ゆふ。と。權ハ。因ひ  
て。あ。の。瓜。音。の。性。よ。山室。う。ん。あ。う。す。曲。ハ。想。慕。舊。者。ハ  
數。う。の。是。權。ハ。と。追。よ。夜。慕。か。根。と。虛。よ。因。つ。よ。あ。ふ。ま。玉  
手。四。幽。幽。屏。が。陳。ある。洞。ゆ。と。ぐ。て。此。道。あ。づ。ら。く。音。霧。ぬ。眼  
て。縛。つ。て。は。文。章。水。煙。の。跡。も。さ。モ。と。づ。か。拙。う。す。文。と。の。ひ。容。と。ひ。  
類。ひ。よ。ま。る。小。室。父。源。秀。も。元。來。ハ。由。緒。あ。武。士。の。是。と。眞。う。

袖あわ外ほかの物語ものがたりをまよつけても人間ひとの榮枯えいかく浮沉ふちんなどもおきりのいから  
す。誠や行河ゆぎの流域えい経くて、あらも元もとの水みず非まざと故ゆゑ人の歎かなうも  
宣くわうり。旅持たどり方かたハ旅更たびよ道みちをまよ草くさねば男おとこの上うえをさうる夢ゆめの草くさ也よ。  
行ゆま我われ方かたを因いんひづけ水みずの面おもてを歩ある詠よめ阮げん湘しょう日夜東ひがし流ながれ去はて愁うき人のあ  
る暫まことにも止とまらずといふ詩しも與よひせき。秦きん一いっ河かをすくいバそれと  
きくぬ離妓わかれのたま。椎しいハグ袖あわをひく花賜はなまのまことまこと待まつ候まわて居ゐま  
よ速はや歩あるき。ととのそぐ立たつた曳ひき、朱しゆうをすまーの別荘べっそうの簷いわき  
へふきバ小繁こまごとむとむ琴ことういゆく椎しいハよ向むかひふどけ宿しゆく  
へ迷めぐく妾わらわが行ゆくあすひぬ。外ほかよ増花ぞうかの生なまれやあつる最恨さいごんき  
き意きや。おこうよ椎しいハも詮せん方かたく脊せきを立たつでまよう全左ぜんざあらす。

豫よて皆みな差同さうかの故ゆゑをもすび。腹はらをひりて、口くち捨する寔 實あらうらや。碎く氷ひ  
火ひの中なかろりとも。惜惜びて目め度と本意ほんのいを遂とげ本国ほんこくへ立たつ候まわ。身みも苦くる敗ひ  
きたるまく勇いさはるよき。今いまの憂苦ゆうくを昔むか給たまふとぞ。とまよつきても  
簡ひじよう度と文ふみを言いふり。如ごく先達せんたつく國くにいす四よ季きと曲輪まき  
喧けん嘒けいのわ柄じ技わざ聲こゑ。刀とハ正ただく我わくが辱はず。高藤たかとう四よ筋すじよ駆のけ。公くわ  
と翁おきな。渠くわが豪ごう性せい。力ちからの実じつをたゞせ。と言いふをき。と至いた何なせ。我わ  
そひよ出だ來きり。りよも國くに不ぶ好い帶おびをうり。ハ跡あとの大劫だくの惡あくで。片かた  
時ときも悔くやをす。まだ。示あ一つのを覽のぞ。上う祖そよ所ところ持もつて。私わたくしも。孫まご子こ孫まご。後あとを  
を訊たず問たず。と。吳ご大夏だいの物ものうと。のふきく。子こ細ほそ。上う語ごらす。定じめ。而よりて。游あままの  
のりと有ある。喜よんで。と。愛あう。椎しいハ立たつを傾かたむけ。何なんを恒つねに燒や。

と近侍をうとや倘を境の裏よ梅の花の形を繕ひてあしゆるや。され  
みよ宣のふ。境の裏よ梅を夷骨う如何よして夫をかくすと  
いづくまでを境とぞ我が因を發宣せむの如き靈廟一塚安葬  
と疑ひる。被品ハ先達と房総の間を略行折へり。とある遊旅を  
賊のみか奪ひそらま。其處よ落散ひては行舟うつ風うよ是の  
正へ。益城が同類を集る割舟うつて。あまうる所彼の國は。強  
盜の首領うる。ひすみが船ぬく。高藤四郎も。おもが盜みく。而等  
せんもまたうどじきて田代は。來ゆりや。小窓日ひわき折  
第事にかか鶴。強面當待。ひづか不丹。かかて立候。ひづか。只今  
ゆか途の人の遣。がちきぬ駆けで。せうまく。同前。

